HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	野鼠驅除のため北海道近島へイタチ放飼とその成績
Author(s)	犬飼, 哲夫
Citation	札幌博物学会会報, 17(3-4), 56-59
Issue Date	1943-12-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/64356
Type	journal article
File Information	Vol.18No.3-4_003.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

野鼠驅除のため北海道近島へイタチ放飼とその成績

The result of introduction of the Japanese mink into the adjacent islands of Hokkaido with the purpose of rat control.

(With English résumé, p.59).

犬飼哲夫
Tetsuo Inukai
北海道大學農學部動物學教室

緒論 本邦に於てはイタチ *Mustela itatsi itatsi* Temminck は有力な野鼠の天敵であることは既に岸田（1927）犬飼（1934, 1935）により報告された。岸田氏は本州で冬期に採集されたイタチ 106頭のうち43頭、即ち40.1%が鼠を捕食していたことを明らかにし、犬飼は北海道で採取した103頭の胃内容物の調査で52頭即ち50.4%、及びその後138頭の調査で70頭即ち50.7%が鼠を捕食したことを報告した。更に犬飼は昭和9年10月より同10年2月末日迄に蒐集した156個の胃内容を檢して鼠捕食率が52.5%であつたことを確めた。

他方、イタチは本邦に於ける野生毛皮獸の冠たるもので、北海道からは近年は毎年 5～10万枚の毛皮生産を見、本邦全産額の10分の1 を產する。イタチを本邦で增殖せしめることは野鼠驅除と毛皮生産の一石二鳥をねらうもので產業上益するところが少くない。

元來野生の獸類は土地の開發と人口の增加により漸次その數を減ずることは多くの例に示されているが、イタチはこれと異り、本邦に於ては大都市を除いては寧ろ人口の增加と共に增加した傾向が見られる。即ち余が曾て報告した如く（犬飼1934）北海道に於ては未開墾地の開發と共にイタチは奥地に侵入し增加したものである。依つてイタチを野鼠の天敵として利用する上にこの習性は極めて有利で、茲に於て余は 昭和7年以來、樺太、利尻島、禮文島、奥尻島等のイタチの未だ棲息していなかつた地方に新しく移入放飼してその結果を觀察して來たのである。

天敵の存在しない地方に於ては、野生動物は突發的に大發生することは屢々記錄された。本邦の野鼠の大發生の記錄としては、德田（1932）が千島エトロフ島で明治26年、同42年、大正12年の 3回に亙るドブ鼠の大發生と、余（1939）の樺太南部に於けるドブ鼠の大發生とがあり、猶北海道天鹽にも明治42年に大發生をした。

こゝに於て鼠の大發生の危險のある地方に天敵であるイタチを放飼して自然界に均衡を保たしめる必要があり、又北方に於ける天然要素を利用して優良毛皮の生產を計るために本計畫を猶繼續中である。

放飼の方法 イタチを自然に放飼する際に余は初め、札幌附近で他の人に依頼し或は自ら生け捕り式のおとし箱を用ひて捕獲し、これを實驗室にて飼育し、相當期間後に放飼したが、後には野外で捕獲したものを飼育することなく現地に送る方進にした。

イタチの捕獲はすべて北海道内で行ひ、9月から1月に亙つてなしたが、9,10月に山から里に出る谷口にトラップを設置することが最も効果的で、用ひたトラップは本邦に於て古くから一般に民間に用ひられていた、入口が5寸四方長さが 1尺位の箱型の自働式の木製おとしで、箱の入口と反對側は金網かガラスを用ひて入口から見通しがきくようにする方がよい。

輸送にはトラップより稍小型の木箱を用ひ、中間に板のしきりを作り、 2寸四方の出入口を上部に作り、一方には乾草等を巢材料として與へ他方には餌として鼠、鷄の頭、生魚等を與へた。最初は飲料水を餌と共に與へたが、イタチは輸送中にこの水で濡れるため斃死するものが多いことを發見したので、後には數日間の輸送でも全然給水せずに、却つて好結果を得た、現場では輸送箱の一方を開けば多くのものは直ちに躍り出て走り去るのを見た。船輸送に對してはイタチは比較的弱く、永く船中に留めた時は斃死數も增加した。捕獲から輸送は多くは冬期に行はれたが、寒氣に對して特別處置の必要を認めず、只乾燥狀態に置くことが最も注意を要する點であつた。

利尻島への放飼

利尻島に放飼したイタチはすべて實驗室内に2年乃至3年間飼育したもので、小樽港から海上20時間を要して、鬼脇港に陸揚して放飼した。從つて輸送の途中斃死したものはなかつた。放飼の年次及頭數は次の如くである。

年次（昭和）	頭數 ♂	♀
8	3	3
9	24	2
10	1	2
計	28	13

即ち昭和8年より同10年に亙り雄28、雌13合計41頭（林業試驗場より3頭）を放飼した。その後昭和24年3月即ち放飼後14年後に同島を調査したが、島民の談話によれば全島一圓にイタチが分布し、最近では秋期に人道で屢々イタチを目撃するに至り相當增加したことが明らかで、島民の自發的捕獲禁止の掟にかゝはらず數年來若干の毛皮が取引されているのを確めた。

禮文島への放飼

禮文島へは前後2回放飼した。第1回は札幌附近で捕獲したものを汽車で凡そ10時間を稚內に送り、更に4時間の船便によつたもので、昭和15年11月4日から12月5日迄の約1ヶ月間に26頭を送つた。（♂22, ♀4）

第2回は昭和18年11月より同19年1月にかけて日高國様似附近で捕獲したのを一度約10時間を要して札幌に送り、給水及給餌をなし、更に稚內を經て禮文島に送つたものである。83頭の內稚內迄に8頭、船中で21頭斃死し島に放飼したものは62頭である。

年次（昭和）	頭數 ♂	♀
18～19	45	17

第1回及び第2回を合せ雄67頭雌21頭を放飼したものである。即ち第2回の結果から、野生イタチを直ちに輸送する場合の生存率を見れば74,6%である。

利尻島及禮文島に於ける放飼と鼠害の關係

利尻島に於ては放飼後既に14年を經過しその增殖の跡は明瞭であるが禮文島では未だ顯著に現はれていない。利尻島に於けるイタチ增殖と野鼠の被害の關係は一般的には島內に於て放飼以前のような著しい害はなく、植林地に於ては著しく鼠害が減少したことが認められる。今イタチ放飼前の兩島に於ける鼠害の狀態を稚內營林署の調査により記せば次の如くである。

年次（昭和）	野鼠被害面積（ヘクタール） 利尻島	禮文島
5	14.72	6.69
6	14.72	15.33
7	44.49	13.00
8	44.42	17.33
9	44.42	17.33
10	51.11	17.19
11	51.51	17.19
12	53.69	21.20
13	15.68	27.19
14	22.68	23.19
15	10.18	13.35

兩島では野鼠の被害は昭和7.8年頃から急に增加し利尻島では昭和12年が最も大きく53ヘクタールを超えた。イタチを放飼したのは昭和8年と10年であるが、放飼されたイタチが增殖を始めたと思はれる昭和13年からは急に被害が減少し昭和15年には僅かに10ヘクタールで昭和5年の放飼前よりも輕微であつた。これがイタチ放飼の結果かどうかと云ふことは正確に斷定し難いが、地理的に見て殆ど同様な狀態にある隣島の禮文島を見るに、昭和7.8年頃から增加した被害は、利尻島と同様昭和12年も依然として上昇しているが、利尻島では昭和13年から急に減少しているのに反つて13年には益々增加し14年も猶經續しているので、これがイタチ放飼による結果と見ても差支ないと思ふ。因に昭和16年以降は兩島ともに記すべき野鼠の被害が無くなつている。

樺太への放飼

南樺太への放飼は昭和7年3月に始まり、昭和15年迄繼續した。放飼したイタチの內飼育していたもの最初の8頭丈で他は悉く野外で捕獲したものを直ちに稚內に送り、連絡船を利用して大泊及本斗に送りその附近に放飼した。放飼の年次及頭數は次の如くである。

年次（昭和）	頭數 ♂	♀			送先
7	4	4	合計	8	豊原
8	3	4	〃	7	小沼
10	29(4)	5(1)	〃	34	大泊
11	5	1	〃	6	大泊
13	2		〃	2	大泊
14	9(4)	2	〃	11	本斗
15	32(77)	23(7)	〃	55	本斗
合計	84	39	〃	123	

（カッコ內は斃死）

即ち、8年間に雄84頭、雌39頭合計123頭を放飼した。この外に輸送の途中斃死したものは雄85頭雌8頭合計93頭で北海道から送り出した數は總計216頭であつた。

この放飼の結果を見ることは小島嶼の場合と異り困難であるのと、現在は樺太はソ連領であるため調査は不可能であるが、昭和12年頃既に豊原の南部に於て野生イタチ數頭を捕獲した者があり、終戰後ソ連人がイタチを捕獲したのを實見した引揚者があることから察して相當數增殖しているものと思はれる。然し昭和19年頃は未だ充分な數に達していないことは同年のドブ鼠の大發生から見ても明らかである。

奥尻島への放飼

奥尻島へは昭和23年11月27日より12月3日に亙り、島に近い江差附近で捕獲したものを放飼した。輸送箱に入れ船積した數は42頭で島に至る4時間の輸送と留め置きで斃死したものは18頭で、實際放飼したものは雄18頭に雌6頭の24頭である。

輸送中の斃死率に就て

野外でイタチを捕獲する場合概して雄が多く雌が少く、凡そ3:1に當るが、輸送中の障害に對して雌は雄よりも抵抗力が大きい。樺太に送附したイタチの內昭和15年度の例を見るに雄は送附總數 109頭の內77頭が斃死し、無事に到着放飼されたものは32頭で29.3%に當る。然るに雌は送附總數30頭の內斃死したものは 7頭で、生きて到着したものは23頭即ち76.5%で雄の約2倍以上に當る。斯る例は何れの年に於ても見られる。野生のイタチを捕獲後直に輸送放飼する場合の生存率は約60%で、野外より捕獲し若干期間飼育する場合も初めの間に相當の斃死を見、餌料に馴れてから後に抵抗力が大きくなるものであるから、實際に放飼をする場合には經費と勞力を倒く上から、捕獲して長期飼育して然る後に放飼することは不利である。

結　　論

本州に産するイタチは約80年前北海道に侵入し、寒地の生活に適應して增殖したが、更に北方の樺太に於てもよくその自然環境に適して生活し得ることを認めた。依つて北海道周邊の島嶼に移入しても、これに適應して增殖せしめ得ることは明らかである。實際に於て利尻島、禮文島の移入に成功し、利尻島に於ては野鼠驅除の目的を充分に果している。奥尻島へも昭和23年より放飼を開始したが、これ又必ず成功し得るものと確信するが、その結果は10年を經なければ明らかに現はれない。

文　献

犬飼哲夫 1927 北海道に於けるイタチの冬期の食性 札幌農林學會報 25年108號
———— 1934 イタチの北海道内侵入經路とその利用 植物及動物 2巻8號
———— 1935 イタチの食性研究及び其の保護策に就いて 應用動物學雜誌 7巻1號
岸田久吉 1927 冬期に於けるイタチの食性調査成績 農林省鳥獣調査報告 第4號
德田御稔 1932 エトロフ島に於ける鼠禍に就いて 動物學雜誌 44巻529號

Résumé

The Japanese mink, *Mustela itatsi itatsi* Temminck, which was introduced into Hokkaido from the main island about 80 years ago by chance, covered the whole inland area until about 1935. Kishida (1927) and Inukai (1935, 1936) have proved that the animal is one of the powerful natural enemies against rats in Japan. The author has caught alive minks in Hokkaido and sent them to the neighbour islands for the purpose of rats control and for the production of the fur.

First, during 8 years from 1932 to 1940, 123 animals of which 84 were males, were sent and set free successfully in southern Saghalien. Since 1937 some minks heve been seen in nature south of Toyohara city and sometimes captured by the natives.

Into Rishiri, a small island north-west of Hokkaido, 28 males and 13 females were sent from 1933 to 1935. They increased tolerably in number and at present we can see them everywhere in the island. It is noted that the damage of the rodent against the younglings of the plantation has been decreased remarkably since 1938. In the neighbour island, Rebun, 88 heads of the alive mink of which 67 were males, were released from 1940 to 1944. In the fall of 1948 18 males and 6 females were sent into Okujiri, a little island south of Hokkaido,

From the economical point of view, it is advisable to ship the alive mink immediately after the capture, as the motality of the animal does not much differ from the case of feeding it for some period. Anyhow, the female animal is more resistant than the male against the treatment.

樺太放飼には樺太廳，禮文島放飼には，稚内營林區署，奥尻島放飼には，北海道廳畜產課及び林政課狩獵係の財政的後援を得て行つた。此處に感謝の意を表し度い。